
バカとDクラスの努力っ娘

らうでいー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとDクラスの努力っ娘

【Nコード】

N5407Z

【作者名】

らっでいー

【あらすじ】

植物を愛していて、何事にも努力を怠らない少女、「千草すみれ」は、その努力が裏目に出て実力を発揮できずDクラスに所属してしまう。すみれがDクラス代表の平賀や百合っ娘清水、そして明久の天敵玉野達と送る、スクールライフが始まります。

第1問（前書き）

初めましてらうでいーです。

これが初投稿です。これから頑張っていこうと思っています。

コラボというものに憧れているので、それが出来る境地に至るまで成長したいと思っています！

感想を書いていただけると嬉しいです。

第1問

(うう、頭が痛いです)

振り分け試験当日、筆を走らせる音が響く教室で一人の少女、千草すみれは机に顔を伏せていた。

(失敗です。徹夜なんてしなければ良かったです)

なんとかして顔を上げるが、頭痛のせいでまるで頭が働かない。

(取り敢えず、あまり考えなくても解けそうな問題だけでもやらな
いと)

頭を抑えながらできる限り筆を動かすが、10分くらいするとまた顔を伏せてしまう。

それを何度も繰り返し、ようやく最後のテストの終わりを告げるチャイムが教室内に鳴り響き、

(チャイムが頭に響きますうー!!)

すみれは強烈な頭痛で意識を持っていかれそうになるが、なんとか耐えるとフラつく足取りで教室を出て行った。

振り分け試験の数日後、校舎へと続く坂道の両脇に咲き誇ってい

る桜の木の下で、 すみれは優しい手つきで木を撫でながら何か呟いている。

「桜さん。 今年も綺麗ですね。」

学校に登校してきている他の生徒達は、 そんなすみれの姿を見て微笑みを浮かべている。 一部の生徒は鼻の下を伸ばしながら彼女のある一部分を凝視しているが。
そんな良い意味で目立っているであろうすみれに、 声をかける一人の生徒が。

「すみれちゃん、 おはようございます。」

「あ、 美穂ちゃんおはようございます。」

すみれは挨拶をしながら美穂と呼ばれた少女に抱きつき、 抱きつかれた美穂は苦笑いを浮かべながら頭を撫で、

「すみれちゃん、 桜とのお話もいいですが、 そろそろクラス発表を見に行きましょう。」

「はい。」

歩き出すためにすみれは美穂から離れ、手を繋いで欲しいと催促するように伸ばした小さな手を、 美穂は優しく握る。

その光景はまるで姉妹のようで、 実際にすみれは精神的にも肉体的にも（一部を除いて）幼いので、 家が近所で幼馴染の美穂が姉のように面倒を見てきたのだ。

二人は桜の並木道を少し歩くと、

「おはよう、 千草、佐藤」

浅黒い肌に鍛えるかれた筋肉がスーツ越しにでも分かる、プロレスラーと言われても疑われない男、

「「おはようございます、 西村先生」」

文月学園の補習の鬼、 生活指導担当の鉄人こと西村宗一教諭が立っていた。

「佐藤、 よく頑張ったな」

そう言いながら箱から二通の封筒を取り出し、 片方を美穂に手渡す。

美穂は受け取った封筒の上の部分を丁寧に破いていき、 中の紙を取り出す。

「美穂ちゃん私にも見せて」

「はいはい」

美穂のクラスを見ようと小さな体でびよんびよんと飛び跳ねるすみれの為に、 美穂は膝を屈めて紙を開ける。

『佐藤美穂………Aクラス』

「Aクラス！ 美穂ちゃんすごい！！」

「ありがとうございます。すみれちゃんも私より頭いいんですから、きつとAクラスになってますよ」

「え、 えーと、 それは……………」

Aクラスになれて満面の笑みを浮かべている美穂から気まずそうに顔をそらす。

「残念だったな千草。 先生達もこの結果に驚いて親御さんに電話で聞いたよ。 体調管理はしっかりせんとな」

「あう……………」

西村教諭は持っていたもう一つの封筒を、 顔を伏せているすみれに手渡し、

「お前の成績なら徹夜さえしなかったらAクラス確定だったのにな」

「あ、 西村先生！ それを言っちゃだー」

「……………すみれちゃん？」

「はいいい!?!」

「あれ程……………徹夜はダメって言ったのに」

「う、 うめんなひゃい!」

すみれが美穂の前で一番言っただけ欲しくなかったことをポロリとこぼしてしまい、 美穂は完全に表情を消し、 すみれは両手で頬を引っ張られながら泣きそうな顔で謝る。

「はぁー、 まあ終わったことは仕方ないですし、 早く封筒を開けてください」

「う、 うん」

引っ張られた頬に痛みを感じながら、 封筒を開け、 中身を取り出し、 自分のクラスを確認する。

『千草すみれ・・・・・・Dクラス』

「・・・美穂ちゃん、 どう反応したらいいのかな？」

「・・・取り敢えず、 Fクラスではなくて良かったですね」

「・・・うん」

オリキャラ設定

名前 千草すみれちぐさ

身長：139.9cm

体重：NG項目です

髪：髪の色は紫色で、髪型はツインテールだが、後ろ髪は肩にかかる程度で残し、もみ上げも残している。

顔：若干たれ目で童顔で守ってあげたくなるような顔をしている。

胸：も、もう少しでEカップ！

悩み：身長があと少しで新境地に達することが出来るのに、中々伸びてくれないこと

ここから先は若干ネタバレ含むのでお気を付けてです

好きな言葉は努力で、努力をしている人は応援したくなる。努力をバカにしたような発言には怒る。

植物が大好きで、許可を貰って文月学園の生物学教室にたくさん

植物を育てている。

お気に入りにはハエトリグサのパツクンチョさんとウツボカズラのうすら卵ちゃん。

家族構成は、父、母、姉、自分。

学力はAクラスの学年主席並だが、テスト前に徹夜でテスト勉強をした結果、振り分け試験当日に激しい頭痛に襲われ、実力を出しきれずにDクラスとなった。

一番の親友の佐藤美穂。すみれの姉的存在で、美穂もすみれのことを妹のように思っている。

第2問

「・・・・・・・・普通としか言いようがないです」

自分のクラスを確認したすみれは美穂と別れ、一度生物学教室に寄ってからDクラスの教室に向かった。

Dクラスの教室は良く言えば『普通』。悪く言えば『変わりばえのない』設備で、すみれは内心がっかりしていたが、

「でも、でもでも！ Dクラスはきつといい所です！ そうに
違いないです！」

自分に言い聞かせるように呟くことで、暗い気持ちを吹き飛ばし、
ポジティブ思考全開でドアに手をかける

「おじゃまします」

「お姉様！？ お姉様はどこに！？ ドコニ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そつとドアを閉める。

（変な人です。いきなり変な人を見てしまいました。いや、
きつと見間違いです。 Dクラスは素敵なおんなですー！！）

先程よりももつと強い口調で自分に言い聞かせながら、再度ドア
に手をかけ、

「お、おじやましまー！」

「アキちゃんはどこ!? 私今日の為にメイド服に巫女服、ナース服にビキニも用意してきたからお願い! 出てきて!」

勢いよくドアを閉める。

「……………どうしようパツクンチョさん。私Dクラスで友達が出来そうにないよ」

生物学教室に寄った際に取って来たハエトリグサの『パツクンチョさん』に泣きそうな顔で話しかける。

すると、パツクンチョさんはすみれに向かって

「パクパク（努力すれば、できない事なんてないぜ!）」

「パ、パツクンチョさん! そうだよ、努力したら大丈夫だよね!」

すみれは確かに聞こえたらしいパツクンチョさんの助言に勇気づけられ、3度目のチャレンジとなるDクラス入室を決行するために、ドアに手をかけ、勢いよく開くが、

「おじやまします!」

「オネエサマアアアア!」

「アキちゃああああん!」

「ひゃづう!」

目の前に現れた二人の変人に呆気なく決意を撃沈され、床に座り込んでしまい、目元には涙まで浮かべてしまう。そんなすみれの姿が目に入ったのか、教室から一人の少年がすみれに駆け寄ってきて、

「だ、大丈夫!？」

と、声をかけた。それに反応して、すみれは恐る恐る顔を上げる。

「ひ、平賀君？」

「千草さんどうしたんだい？ 君はAクラスのはずじゃなかー！」

「平賀くううううん!!」

「うわあ！ え、ええ!？ い、いきなりどうしたんだい!？ 少し落ち着いて!!」

自分自身も、すみれにいきなり抱きつかれパニック状態を起こしている平賀だが、それ以上にすみれは変人ばかりだと思っていたDクラスから出て来た、1年生の時に同じクラスだった『平賀源二』の姿を見て、不安でいっぱいだった感情を爆発させ、涙を流した。

「（嬢ちゃん良かったな。普通の奴がいて）」

「パクパクパク（起きる嬢ちゃん。坊主が困っているぞ）」

「……………ハッ！」

「あ、千草さん、自己紹介、次君の番だよ」

泣き疲れて眠ってしまったすみれは、パクンチョさんに起こされたような感覚を感じ、目を覚ますと、目の前に僅かに頬が赤い平賀の顔が目映る。

「ふえ？ 眠っちゃってたんだ私」

目をこすりながら平賀の膝の上に置いていた頭を上げる。少し残念そうな表情を平賀は浮かべたがすみれは全く気付かず、

「自己紹介、行って来ますです！」

「ここでもやるんだけどね」

教卓のある教室の前の床に座っている平賀と、教卓の上にいるパクンチョさんに敬礼をするすみれの姿に、平賀は苦笑いを浮かべる。

「えーと、千草すみれです。植物が大好きで、ここにいの

はハエトリグサのパックンチョさんです。 1年間よろしく願い
します」

『『『』』』』お願いしまーす』』』』

存分に泣いて不安も全て消えたようで、 いつも通りの笑顔を浮か
べながら自己紹介するすみね。

周りはパックンチョさんという異形の存在があるにも関わらず、
少女の笑顔につられて普通に挨拶を返してしまう。 その後、

「あの、 美春はちょっと質問があります」

一人の少女が手を上げる。

(あ、 さっきの変な人1号さんだ)

すみねは質問者が、 オネエサマ、オネエサマと言葉を発していた、
オレンジ色の髪をドリル状のツインテールにしている美春という
少女だと気付き、 少し体が震えたが平静を装い

「はい。 なんですか？」

「何故あなたがDクラスなんですか？ 学年主席レベルのあなたが」

「え、 えーと、 試験当日に頭痛で実力が出せなかったから・・・
・・・です」

ああ、 そういうことが、 と頷く周りの生徒達。 彼らもそのこ
とにはやはり疑問を持っていたようだ。

「じゃあ、私も質問です」

(こ、今度は変な人2号さんだ)

「平賀君とすみれちゃんって、付き合っているんですか?」

次に手を上げたのは、アキちゃん、アキちゃんと叫んでいた三つ編みの少女で、今回も体を震わせながらも平静を装いながら答えようとするが、

「……………へ?」

「何を言っているんだ玉野さん! 僕と千草さんはそんなんじゃない?」

『でもさっき、膝枕してただろう!』

『ビュービュー!』

『お似合いねお二人さん』

質問の意味が分からず首を傾げるすみれと、顔を真っ赤にして否定する平賀に向かって、周りから飛び交うからかいの声に、すみれはさらに首を傾げ、

「平賀くん。私たちって付き合っていたの?」

『とぼけるなよ千草さん』

『熱いねーお二人さん』

『ラブラブー』

精神的に幼いすみれには、恋愛関連についての感性は著しく不足しているためか、今の自分が置かれている状況を全く理解していない。それは結果的に周りをさらに盛り上げさせてしまい

「ちょ、ちょっと待ってくれみんな!!」

平賀のピュアハートに周りの声突き刺さり、ますます顔を真っ赤にさせる。どうにかしないと、と思う平賀だが、恥ずかしさと、実際には結構嬉しかったりする自分の心に邪魔されて、中々打開策が浮かばない、その時だった。

「すいませーん」

ガラッ、とドアが開く音とともに、どこか抜けてそうな声がDクラスに響き、生徒達は一斉にその方向に顔を向けるとそこには

「えっと、Fクラスの吉井明久です。FクラスはDクラスに宣戦布告をします」

文月学園史上初めて観察処分者になった悪い意味で最も有名な男の一人、吉井明久が立っていた。

第2問（後書き）

どうも！らうでいーです！

この小説では原作と少し違い、玉野さんが既に『アキちゃん』こと明久の魅力に気づいてしまっています。

そしてパッケンチョさんの台詞は「」で表しています。 まあ、

実際は喋ってないんですけどね（笑）

第3問

『『『………』』』』

突然の来客によって、無言に包まれるDクラス。 そんな中すみれだけは驚いた素振りもなく

「いらっしゃいませです〜」

「あ、どうも」

と、明久を招き入れて、戸惑いながらも明久はDクラスの中に入れて行く。

「吉井くん、でしたよね？」

「うん。君は？」

「千草すみれです。そしてこの子がハエトリグサのパクションチョンさんで、こちらはDクラス代表の平賀源二くんです」

「パクパクパク（バカっぽい顔だなおい。 しかも天下一品のバカだぜこりゃ）」

宣戦布告をしにきた、つまり敵の明久と交友関係を築こうとしているすみれ。 その様子を呆然と見ていた平賀が慌てて我に帰り、

「千草さん彼は敵だよ！ 仲良くしてどうするんだ！！」

「ふえ？ 敵ですか．．．．ハッ！ 私と仲良くするように見せかけて実は情報を奪おうとしていたんですね！！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 先に仲良くしようとしてきたのは千草さんでしょ！？」

「私とは仲良くしたくないんですか！？」

「是非お友達になってください」

「やっぱり情報を奪おうとしてますー！！」

「ええ！？ じゃあ僕はどうしたらいい『』吉井を潰せー！！『』
な、雄二イイイイ！！ やっぱり嘘だったじゃないかーっ
！」

すみれの天然の揺さぶりに明久が苦戦している間に、Dクラスの生徒達は我に帰り、明久に襲いかかる。

「このお姉様にまわりつく豚野郎！！ ここで美春が抹殺してさしあげますわ！！」

「アキちゃんアキちゃんアキちゃんアキちゃんなの！！?? やっぱり私の持つて来たお洋服を着たくなつたのね！！」

「何この二人怖いよ！！ 今日の午後から開戦だあああああ！！
！ 確かに僕は言ったからあああああ！！」

特に美春と玉野の二人は明久に対して過剰な反応をしめし、顔を

真つ青にして伝えたいことだけ言ってDクラスを駆け出して行った
明久を追って飛び出す。

「……………千草さん。よくやってくれた」

「え、そうですか？ えへへへ」

「パクパクパク（天然は怖えな）」

「さあ、開戦だあーっ！！ Fクラスのバカどもを叩きのめすぞ
ー！！！」

『『『うおおおおおお！！！！』』』

「おー」

13:00、DクラスVS Fクラスの試験召喚戦争が幕を開ける。
Dクラスから続々と生徒達が気合の入った顔付きで出てくる。そ
してすみれもヤル気満々で教室を出て行くこととするが、

「あれ？」

後一步で教室を出ることが出来るのに、それ以上前に進めない。
誰かに肩を掴まれているのだ。

「平賀くんはーなーしーてー!」

「……………千草さん。君は補給試験を受けてって言ったよね」

「みんなが頑張っているのに、私だけテストを受けるなんてみんなに悪いです」

「……………千草さんが補給試験を頑張ってくれることが、みんなの頑張りを応援してくれることになるんだけどなー」

「行つてきます!」

すみれとは去年も同じクラスだったためか、平賀は駄々をこねるすみれの扱い方もすっかり心得ているようだ。すみれは平賀の思惑通り、ピシッ、という音が出そうな勢いで敬礼をして、自分の席に向かった。

「先生、テストお願いします」

「分かりました。では千草すみれさん、始めて下さい」

「パクパク（嬢ちゃん頑張れよ）」

カリカリカリカリ、とテスト開始直後からすごい勢いで筆を走らせるすみれ。これには教師も教室で待機していた平賀達も驚きを隠せない。

「す、すごいね千草さん。これだったらCクラスの設備も取れるかもしれない」

「えへへへ、すごいでしょう。あ、先生新しい問題くださいです」

「も、もうですか!? わ、分かりました」

開始10分も経たずに新しいプリントを貰うすみれ。そんな姿を見て平賀は思わず笑みを浮かべてしまう。

「先生! もう一枚です!」

「は、はい!」

「パクパク(嬢ちゃんいい調子だ)」

どんどん問題を解いていくすみれ。そんな時だった。

ピンポンパンポーン 《連絡致します。 船越先生、 船越先生。

吉井明久君が体育館で待っています》

「ん? どういうことだ?」

突然かかった放送。それを聞き、戦争の相手であるFクラスの宣戦布告の使者をやっていた明久が何故このタイミングで体育館裏に? と、Dクラス内にいる人間が全員疑問に思ったが、その疑問は、誰もが思わぬ理由で解消されることになる。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

第4問

『代表！ Fクラスの奴ら下校する生徒に紛れて攻めてきているぞ！！』
塚本隊長もやられた！！』

「なんだって！？ ちっ、 姑息な真似を。 Dクラス本隊出るぞー！！」

『『『おおーっ！！』』』

「おー」

「だから千草さんは出ないから」

戦争開始から約2時間が過ぎ、 ついに本腰を入れて攻めてきたFクラスを撃退するため、 主戦力を集めたDクラス本隊は出陣の準備を始める。

「アキちゃんはいるの！？ アキちゃんは廊下にいるの！？」

その中でも人一倍、 いや五倍と言っても過言ではないだろう玉野は、愛しのアキちゃんこと明久のことを考えて目を輝かせている。

「パクパク（こりゃ、 こいつは独断で行かせた方がいいんじゃないかねか？）」

「玉野さん。 吉井は多分廊下にいるから捕まえてきて構わないよ」

平賀もパツクンチョさんと同じことを考えていたらしく、玉野の欲望を解き放つ許可を出すよ、

「本当に!? アキちゃん待っててねええええええええええええ!!」

目が光源体じゃないかと思うくらいに光輝かせて、Dクラスから飛び出す。その直後、

『Fクラス近藤がDクラスの玉ーー』

「アキちゃああああああああん!!」

『な、なんだと!? あっという間に俺の召喚獣が!?』

『お、俺もだ!?』

『こ、こつちに来るなあああああああ!! 戦死したらーー』

「戦死者は補習!」

『『ぎゃあああああああ!!』』

廊下から響く玉野の叫び声、Fクラスの悲鳴、そして鉄人のドスの効いた声。それだけで戦場の状況を把握した平賀は一瞬呆けてしまうが、すぐに気を取り直し

「よしみんな! 玉野さんに続くんだ!!」

『『『うおおおおおおお!!』』』

「おー」

「パクパク（だから嬢ちゃんは違っつて）」

玉野が切り開いたFクラスへの道を突き進む為に、
戦場に躍り出た。

．．．．．ちなみに玉野は

「離して！ アキちゃんが目の前にいるの！！」

「て、 鉄人！ 早く玉野さんを連れて行って！ この子は危険すぎる！！」

惜しくも明久の目の前で力尽きてしまっていた。

静寂に包まれているDクラスの教室。そこにはひたすら筆を動かすすみれと先生、そして口をパクパクさせているパツクンチョさん。
そしてすみれはその静寂を打ち破るべく筆を動かすのをやめ、勢いよく立ち上がり、

「終わったですー！」

「パクパク（よくやった嬢ちゃん）」

小さな体で大きな雄叫びをあげ、それを褒めているかのように口をパクパクさせるパツクンチョヨさん。

そのまま机の上にいるパツクンチョヨさんが入った植木鉢を手に持ち

「すみれ、行きまーす！！」

ヤル気満々で教室を出ようと走り出すが、

「うわっ!?!」

教室の入り口で足を引っ掛けてしまい、

「パクパク!?!（うおおおおおい!?!）」

パツクンチョヨさんを持っていた為手をつく事が出来ず、顔から床に落ちてしまう。

「パクパク（嬢ちゃん大丈夫かい?）」

パツクンチョヨさんはすみれを心配しているように口をパクパクさせるが反応がない。

幸いなことにすみれは植木鉢を離さなかったのでパツクンチョヨさんは無事だったが、その分の痛みは受けてしまったようだ。転んでからまだ起き上がらない。

「うう、痛いよう」

それからしばらくして、ようやく顔を上げたすみれの目には涙が溜まっていた。

そして次の瞬間痛みで泣き出す…….のではなく、

「Fクラスの人達の畏に嵌っちゃったです。もう怒ったです!!」

「パクパク!? (ええ!? 今のは嬢ちゃんがドジだったただけなんじゃ!?)」

頬を可愛らしく膨らませる。でもその理由は可愛らしさの欠片もなく思い込みからのただの八つ当たりだ。だがすみれは思い込みだら一直線にただ突き進む。もうこうなったら誰も止められない。

「私がFクラスの全員を倒すです!! 試験^{サモン}召喚っ!!」

その掛け声とともに、足元に顕れた幾科学的な魔方陣から、すみれの花と同じ紫色のドレスを身にまとい、手には一つの植木鉢を持ったすみれがデフォルメされた召喚獣が現れ、頭上には科目、クラス、点数が表示される。

『現代国語 Dクラス 千草すみれ 447点』

思い込みが生んだ、学年主席レベルの小さな少女の復讐劇が今始まる!!

第5問

「Fクラスは全員一度撤退しろ！」

廊下に響くFクラス代表の坂本雄二の声。

「逃がすな！ 個人同士の戦いになれば負けはない！ 追い詰めて討ち取るんだ！」

しかしその声に反応した平賀もすかさず指示を飛ばす。

欲望にまみれた玉野さんの特攻により、Fクラスの生徒達はかなり戦死したことで、Dクラスは個々の実力でFクラスを上回っているという理由が、本隊は分散し、追討にかかっている。

「チャンスっ！」

その隙をついたように一人の少年がDクラス代表の平賀の前に飛び込んでくる。 明久だ。

「向井先生！ Fクラス吉井がー！」

「Dクラス笹島圭吾、サモン試獣召喚」

「な、近衛部隊!？」

しかしそんな簡単にやられる訳がない。玉野の欲望を解き放つ指示を出してFクラスの戦力を大幅に削ったように、平賀も指揮官として優れた能力を持っているのだ。バカクラスのバカがバカ正直に突っ込んできても倒せる訳がないのである。

「残念だったな、船越先生の彼氏くん？」

「ち、違う！ アレは雄二が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。千草さんだつて応援してくれるって言ってたぞ？」

「千草さんってあの小つちやい子！？ 僕は今、大きな精神的ダメージを受けたよ！！」

さ、流石Dクラスだ、というような顔をしながらショックを受けている明久を見て、言わない方が良かったかな？ と、少し反省する平賀。近衛部隊の笹島も可哀想なものを見ているような表情を浮かべている。

「くっ、これじゃあ僕の手ではDクラスを落とせない！」

「何を言つかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えても、さすがにFクラスの間人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

反省はするがバカにするのはやめない平賀。それに明久は一瞬悔しそうな表情を浮かべたが、すぐに何か企んでいるような表情で片目をつむり、

「それは同感。確かに僕一人じゃ無理だろうね。だから――」

「――姫路さん、よろしくね――」

明久がそう言った途端、平賀は何を言っているんだ、この馬鹿は？ と思ったが、すぐに気付いた。

そうだ、Dクラスにイレギュラーな存在のすみれがいるように、何か訳ありでAクラスの間人間がFクラスにいてもおかしくない。

そしてFクラスのイレギュラーは明久の言った『姫路瑞樹』。

ただ近衛部隊はそれに気付いていないし、平賀も気付くのが少し遅かった。

「く、くそっ！」

「Fクラス姫路瑞樹、Dクラス代表の平賀君に現国勝負を申し込めます。試験召喚です！！」

『現代国語』

Dクラス	平賀源二	129点	VS	F
クラス	姫路瑞樹	339点		

「平賀君！ Fクラスを舐めていたようだね！！」

その通りだ、と心の中で平賀は頷いた。自分はFクラスを舐めていた。バカにしていた。その結果がこれだ。自分の慢心のせいで格下であるFクラスにやられるんだ。ああ、Dクラスのみんなにはどんな顔をして謝ればいいんだろ。ちくしょう、

「ちくしょおおおおおおお！！」

姫路の召喚獣は背丈のある大きな剣を軽々と振り下ろし、吹き飛んだ。

．．．．．姫路の召喚獣が。

「「「．．．．．え？」」」

この場にいる生徒達は今起こったことを理解出来ない。何故、平賀の召喚獣は無事で、姫路の召喚獣が緑の巨大な何かに吹き飛ばされたのか。

沈黙する生徒達。その沈黙は一人の少女によって破られる。沈黙を破るのは今日、これで3度目になる、

「．．．．．舐めていたのはFクラスさんです」

「パクパク（嬢ちゃん、カッケエ登場のしかたするねえ）」

身長ギリギリ130で紫色のツインテール、手には大事そうに食虫植物のハエトリグサが入っている植木鉢を持っている少女。

「．．．．．Dクラスはあなた達が考えている程、弱いクラスではないでしゅ！？痛い！舌噛んだよう」

大事なところで舌を噛んでしまって、涙目を浮かべている千草すみれだった。

「パツクンチヨさん痛いよう」

「パクパク（よしよし、舌も痛いしこの雰囲気を作ったことも痛い嬢ちゃん）」

折角しまっていた空気が台無しだ。と、この場にいる全ての人間が思う。

しかし姫路だけはこんな状況でも平賀を倒すことだけを見ていた為、素早く平賀に向かって大剣を振り下ろそうとするが、

「だからDクラスはそう簡単にやられる程弱くないです！」

「ああっ！」

それに反応するのはすみれの召喚獣。持っている植木鉢から出ている謎の緑の物体が再び姫路の召喚獣を体当たりで吹き飛ばす。それで我に帰った平賀。

「た、助かったよ千草さん！」

「えへへへ〜」

駆け足で姫路から離れてすみれの後ろに回る。これで平賀の召喚獣はすみれの召喚獣に守られている形だ。

「姫路さんの召喚獣を吹き飛ばしたこの緑の変なのは何!?」

「むっ！ 変なのとは失礼ですー!!」

「パクパク!! (そうだぞこのバカガキ!!)」

明久達も我に帰ったようで、今一番の疑問をすみれにぶつけると、召喚獣の植木鉢から生えている緑の物体を変なの扱いされたことに頬を膨らませるすみれと、何故か激しく口をパクパクさせて怒

っているようなパツクンチヨさん。

「植木鉢から生えているのはー!!」

そうすみれが叫ぶと、姫路の召喚獣を吹き飛ばした緑の物体の長いツタのような物がすみれの召喚獣の植木鉢の土の中に戻して帰ってくる。そして召喚獣の顔と同じくらいのサイズの口を威嚇するようにガバツと開け、

『ギシャアアアアアアー!!』

「パツクンチヨさんばーじょん2ですー!!」

「パクパク（俺カツケエー!!）」

獲物を狙っている猛獣のように、ハエトリグサのパツクンチヨさんばーじょん2がこの場にいる敵であるFクラスの召喚獣に向かって咆哮をあげた。

第5問（後書き）

どうも、 作者です。

パ「俺カッケエー!!」

ふふん！ そうだろう!!

す「カッコいいのはパッケンチョさんです!!」

ムッ！ まあそうなのだが。 でも二人とも、 パッケンチョさんばーじょん2に弱点があるってことは知っているね。

す・パ「え!?!」

.....知らなかったのか。

パ「弱点などいらん!!」

いるわアホ!! だいたい植木鉢で殴って戦うのがすみれの戦闘スタイルなんだよ!!

す「私弱いです!?!」

そうだよ。 だから弱点付きでパッケンチョさんがいるんじゃないか。

パ「ま、 俺は嬢ちゃんの相棒だからな」

す「仲良しですー」

で、その弱点は!!

す・パ「弱点は?」

次回のお楽しみーです。

それでは皆様御機嫌よう!

す・パ「ええっ!?!」

第6問

『現代国語』

Dクラス 千草すみれ 423点 VS Fク
ラス 姫路瑞樹 197点 & 吉井明久 63点』

『ギシャアアアアアア!』

「きゃあ!」

「うわっ!」

すみれの召喚獣を守る守護神^{ガーディアン}、パクンチョさんばーじょん2が明久と姫路の召喚獣を喰らわんとばかりに襲いかかり、それを紙一重でかわす2体。

「ずるいよ千草さんの召喚獣!」

「ずるくないですー!」

そんな光景に周りの生徒達全員が思っていたことを代弁する明久。しかしすみれはこれっぽっちもそんなことを思っていないらしく、

「どンドン行くですー!」

「パクパク（オラオラオラオラ）」

攻撃の手を緩めないパクンチョさんばーじょん2。移動範囲が広いことを最大限に生かし、二体の召喚獣の正面、後方、そして頭

上からとあらゆる方向から頭を噛みちぎろうと牙をむく。流石に避けきれなくなってきた明久と姫路。それでもなんとか武器で攻撃を受け流す。

「吉井君！ これじゃあキリがないです！！」

「くっ！ 誰か援護を！！」

しかし避けは出来ても、本体のすみれは無防備なのに全く近付けない。味方の援護攻撃を待つしかないという状況だ。だが、

「残念だったな吉井！」

「なっ！ 平賀君が千草さんの護衛に！？」

『す、すまない……………吉井、姫路さん』

「戦死者は補習！」

『ぎゃあああああ！！』

Fクラスの二人の生徒が明久と姫路の戦いに集中しているすみれの背後から襲いかかろうとするが、それをなんとDクラス代表の平賀自身がすみれの盾となっている。

「平賀君ありがとーです！ これで勝てるです！！」

「パクパク（いや、 そうでもないぜ嬢ちゃん。今の状況は……………
……………最悪だ）」

「残念だったなDクラス！！ 逆転したぜ！！」

明久も姫路もパツクンチヨさんばーじょん2に押されっぱなし、さらには点数が減っているFクラスの不意打ちも代表の平賀を倒すことが出来ない。一見して完全にDクラスの優勢にしか見えない。しかしFクラス代表の雄二は余裕の表情を浮かべて逆転したと言う。その言葉の意味を理解出来ないすみれ。

「な、なんでFクラスさんが逆転なんですか！ 私達の方が優勢でー」

「じゃあなんで、お前を守っているのがDクラスの代表自身なんだ？」

「……え？」

そう言われて初めてすみれは気が付いた。周りにDクラスの生徒が……いない。その原因は雄二の背後に立っている小柄な少年。

「……保健体育ならDクラスになんて負けはしない」

寡黙なる性識者、ムッツリー二こと土屋康太。保健体育での実力なら学年1位の生徒だ。

雄二は平賀と違って、始めからAクラス並の生徒がDクラスにいるという予想をしていたため保険をうっていた。それがムッツリー二だ。

保健体育の教師である大島先生を待機させ、すみれが現れたと同時に現国のフィールドから少し離れたところで保健体育のフィール

ドを展開。平賀から離れて自分達をうちに来たDクラス本隊を、ムツツリー二の召喚獣の腕輪の能力、『加速』で全員倒したのだ。さらにこれだけではない。

「その小つちやいの。気付いてるか？ お前の召喚獣の点数が減っていることを」

「……………ふえ？ そんな訳ないです！！ 私は一度も攻撃を受けてな……………な、なんで!？」

『Dクラス 千草すみれ 402点』

「気付いてなかったようだな。その緑のデカブツが明久や姫路の召喚獣の武器に接触する度に点数が落ちてんだよ!!」

「パクパク（俺にこんな弱点があったとはな。クソ！ 学園長のばばあめ余計な設定つけやがって!!）」

普通の武器が削れようと折れようと点数に変化はない。しかしパツクンチヨさんばーじょん2がダメージを受けると、すみれの点数が減る。つまりひたすらパツクンチヨさんばーじょん2の攻撃を武器で相殺し続けたら、すみれの点数は0になる。パツクンチヨさんばーじょん2はいわば諸刃の剣だったのだ。

「残念だったなDクラス！ これで弱点丸分かりの最強さんと代表さんの二人、そしてこっちは明久、姫路に加えて、秀吉、須川、島田、ムツツリー二、そして俺が参戦するぜ！！ 試^{サモン}獣召喚っ！」

「……………試^{サモン}獣召喚!!」

『Dクラス　千草&平賀　402点&36点VS
Fクラス　吉井&姫路&坂本&島田&土屋&木下&須
川　52点&150点&98点&13点&26点&73点&6
9点』

Fクラスの残りのメンバー全員が現国のフィールドで召喚獣を呼び出す。これでDクラスは2人に対してFクラスは7人。さらに平賀は先程のFクラスの生徒との戦闘で大幅に点数が削れていた。点数が大幅に高いすみれも、弱点を見破られた状態だ。

「くっ！　ここまでなのか！！」

「ガッハッハッハ！！　この人数差でリンチすれば俺達の勝ちだ！！」

「……………雄二、完全に悪者だね」

「……………そうじゃのう」

雄二に言われ、今の状況を理解した平賀は、拳を廊下に叩きつけ、それを見た雄二がまるでもう勝ったかのように、悪者の笑みを浮かべて下品に笑い、明久と秀吉が苦笑いをしている。だが、

「それがどうかしました？」

すみれは雄二の言葉を聞いても関係ないというような表情を浮かべている。

「……………何が言いたい？」

「ち、千草さん。流石にもう無理だよ」

雄二は完全な勝利を手に入れたと思ったところでのすみれの発言に少し不機嫌な表情を浮かべ、平賀も強がるのはやめろと言う。しかし次のすみれの発言が、その場にいるFクラスの全員の背筋を凍らせることになる。

「私、腕輪をまだ使っていないですー」

すみれの召喚獣の腕輪が光り出し、すみれの点数が402、380、343、311、295、261、222、202とどんどん減っていく。

「パツクンチヨさんは点数を養分として成長するんですよー？」

それに比例して、パツクンチヨさんばーじょん2も成長していく。
点数の減少が止まった時には、

「パツクンチヨさんばーじょん3ですー!!」

口の大きさが召喚獣と同じ大きさになった『パツクンチヨさんばー
じょん3』は、愕然としている雄二をよそに、召喚獣を喰らっ
た。

第6問（後書き）

一つ聞かせてください。

Dクラスが勝利するって予想をしていた方教えてください。

第7問

Fクラス代表

坂本雄二

討死

『うおおーっ!』

その報せを聞いたDクラスの勝鬨とFクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

『あの状況で逆転って凄えよ!』

『平賀代表ありがとう!』

『千草さん流石だぜ!』

『パツクンチヨさんカッコいいー!』

Dクラスを勝利に導いた平賀とすみれ、そして何故かパツクンチヨさんを補習室から飛び出して来たDクラス生徒達が褒め称える。

「お、俺は大して何もしてないから………」

頬をポリポリと掻きながら恥ずかしそうに明後日の方向を見る平賀。対して、

「すごいでしょー! えっへん」

「パクパク (今日から英雄である俺をパツクンチヨ様と呼んでいぞいぞ)」

小さい体で威張り散らしているすみれとパツクンチヨさん。

「クソツ！ あんなのありかよ！！」

すみれの背中から誰かの声。

振り向くと、廊下に拳を叩きつけている雄二の姿があった。

その雄二に近付いていくすみれ。

「最後に油断したのが敗因です！。Fクラスさんも腕輪を使って私達をたくさんやつつけたんですから、私の腕輪にも気付けたはずです」

「パクパク（まだまだ半人前だな小僧）」

「……………返す言葉もねえ」

がつくりとうなだれる雄二。その姿に少し哀れみを感じるすみれ。

「それじゃあ戦後対談を始めようか」

そんな雄二の姿を気にすることもなく、負けたという現実を突き出す平賀。それが代表としての使命でもあるのだから。

「……………分かった」

平賀の言葉に頷く雄二。そして話し合いを始めようとした時、

「Dクラス代表の平賀君」

「ん？ Cクラス代表の小山さんじゃないか？」

後ろから平賀を呼ぶ女性の声。 Cクラス代表の小山友香だ。

「悪いけど俺達今からFクラスとの戦後対談があるから後でいいかな？」

「大丈夫よ。 すぐ終わるから」

そう言ってから少し間をおいて、

「私達CクラスはDクラスに宣戦布告をします」

「……………え？」

「……………ふえ？」

「パクパク（嬢ちゃんを危険視しての宣戦布告だな。 戦争後で弱っているところを狙う。 卑怯な女だぜ）」

「開戦は明日の午後からよ。 それじゃあね」

小山の衝撃発言に理解が追いつかない平賀とすみね。 しかしパツクンチヨさんは冷静に小山の言葉を理解している。

ようやく二人が言葉を理解した時には小山はもう立ち去っていた。 他のDクラスメンバーもことを理解したようで、

『おい！ どうするんだよ代表！』

『このままじゃ勝ち目がねえぞ！』

『嫌！　せつかく設備を守れたのに、　奪われるなんて嫌！！』

今度はDクラスの悲鳴が廊下に響く。

「……………ど、どうすれば」

平賀も今の状況に頭をパニック状態にさせていた。

勝てるわけがない。　ただでさえ相手は格上なのにこちらは戦力が大幅に減った状況だ。

しかしすみれだけは落ち着いた表情を浮かべ、雄二の方に歩み寄り、

「坂本君、　ですよね？」

「……………なんだ？　お前らも大変そうだな」

「協力してくれませんか？」

「……………は？」

突然のすみれの提案に、　雄二だけでなく平賀まで呆気をとられる。

「はつきり言って、　Fクラスの設備が落ちようと私達には関係ないです。　だから、　坂本君が私達がCクラスに勝てるように協力してくれるのなら、　この3ヶ月の間Dクラスに攻めないという条件付きで、　この戦争はなかったことにしますです」

「な、　何を言っているんだ千草さん！　それじゃあ俺達のこの戦争の努力はなんだったんだ！？」

すみれに猛烈に反対の意志を示す平賀。しかしすみれはあくまで冷静に、

「今回の戦争、平賀くんはFクラスを舐めていてまんまとFクラスの作戦にはまったです」

「なっ！」

「あそこで本隊を追撃させなかつたら、私がいなくても姫路さんの攻撃は近衛部隊が防いでくれたかもです。それに姫路さんというイレギュラーを想定しなかったのも平賀くんの落ち度です」

「……………うう」

すみれの反論の余地がない意見に顔が下がっていく平賀。

「それに比べて坂本くんは私がいることも想定していました。それに総合的な戦力では劣っているFクラスがここまで戦えたのもきつと坂本くんのおかげです。現状的には坂本くんにも一緒に作戦を考えてもらえたら絶対勝てる可能性が上がります」

「そ、そうか？」

すみれの褒め言葉に、少し嬉しそうにする雄二。

「ま、最後に調子に乗ったあたりが、やっぱりFクラスだと思っただです」

「……………平賀、このチビひでえな」

「……悪気はないんだろっけどね」

すみれの天然毒舌にやられた両クラス代表は、男二人で慰めあい、それを見たDクラスの腐女子は心の中で歓声を上げる。

「と、いうことでどうですか坂本くん？ 協力してくれますか？」

「……ああ、俺達にメリットしかないからな。お前達Dクラスを絶対勝たせてやるぜ！」

「ということは僕達の試召戦争はまだ終わりじゃないんだよね！？」

『『』』よっしやああああああ！！』』』

「Dクラスのみんなもそれでいいです？」

「……それしか勝ち目がないようだね。それに千草さんの言ったとおり、今回の俺の指示は完全にDクラスを負けに導こうとしたし、今回の英雄の判断に任せるよ。いいだろみんな！」

『勿論だぜ！』

『私達は代表と千草さんのついていくわ！』

両クラスの意見が一致し、今ここに、DクラスとFクラスの共同戦線が誕生した。

第8問

「で、どうしてこうなった」

「いらっしやいませですー」

「」「おじゃまします」「」

DクラスとFクラスが協力してCクラスを倒すということになり、明日がその戦争の日というわけで、すみれの家で作戦会議という事になったのだが、

「なんでFクラスの方が多いんだよー!!」

雄二のごもつともなツツ「ミ」。

「雄二だけ女の子の家に行くのを僕らが許すと思う?」

「.....許すまじ行為」

「吉井君が女の子の家に行くのを黙って見ているなんてできません
「！」

「そつよ! 吉井は何をするか分からないんだから!」

「ちょっと姫路さんに島田さん!? 僕ってそんなに信用されてないのー!?」

「仲間はずれは寂しいのじゃ」「」

と、色々な理由をつけ、Fクラスからは6人の参加者、対してDクラスはすみれと平賀、あと一応パツクンチヨさんも入れて3人と、どちらのクラスの為の作戦会議か分からなくなってしまうっている。

「お友達が多い方が嬉しいですから、遠慮しないで入ってくださいです」

しかしすみれは嫌な顔一つせず、むしろFクラスの面々を歓迎する。

「千草さん。こんな大人数いいのかい？」

「大丈夫です！。私のお家大きいですから」

「すごいよ千草さんの家！ 僕の家の上3倍以上あるんじゃないかな？」

「……ああ、翔子の家ほどではないがかなりでかいな」

心配する平賀をよそに、明久達は家上がり込んでいく。明久とムツツリーニは女子の家だからか、物珍しそうにキョロキョロしながら

奥のリビングに進んで行く。すると突然、

「「#%*\$???!& a m p ; ¥ ! ? (ブシャアアアアアアアア)」

「吉井さんと土屋くんどうしたんです!？」

「何してんだバカ!!」

「パクパク（おい！ 人の家汚してんじゃねえ!!）」

鼻血を大量に出して倒れるバカ×2。 そんないきなりの出来事に慌てて介護しようとするすみれと雄二、そして家を汚されてキレるパツクンチョヨさん。

「一体何を見たんだお前ら！」

「あ、あれ、だよ、雄二。 そして、僕らは天、国へ」

「.....ピュアボーイには刺激が強過ぎた」

鼻血を出した理由を雄二が聞くと、バカ×2は同じ方向を指差し、ガクツと力尽きた。

「は？ こつちに何があるんだっブフウ!？」

「坂本も何があっブフウ!？」

指された方向を見た雄二は、鼻を手で抑えて慌てて顔をそらす。

そんな雄二が気になった平賀もリビングまで来た途端、雄二と同じ行動をとる。 そんな男子組の行動が気になる女子3人は、

「ど、どつしたんですか皆さん!？」

「吉井達はリビングで何を見たの!？」

「ち、千草、ちなみにリビングには何があるのじゃ？」

「えーとですーねー」

そう言われてリビングを見渡すすみれ。特に変わった物はないと思っただが、一応頼まれた通り説明し出す。

「テレビー、エアコン」

「「「うんうん」「」」

「床の上に出た血の池ー、ソファー」

「特におかしいものはないですね」

「そうね」

「では何故明久達はいきなり鼻血をーー」

「ソファーの上でYシャツと下着でお昼寝しているお姉ちゃんしかいないですー」

「「「それ！」「」」

「んう、何ようるさいわよすみれ」

女子3人が原因が発覚して大声を上げ、眠たそうに目をこすりながら不機嫌そうに起き上がるすみれの姉は、床に倒れているバカ×2と鼻を抑えている雄二と平賀、そして床に広がる血の池を見て、

「……………って何よこれ？ 家って男兄弟っていた？」

「いいいですー。 お友達ですー」

170は軽く超えているだろう長身の姉を見て、 その場にいる雄二達は本当に姉妹かと疑ったが、 次の発言を聞いて心の中で前言撤回する。

「と、 取り合えずボンかスカートをはきませんか？」

「嫌よ」

「ええっ!？」

「この格好が楽なんだから」

「……………姉上と同じような人間がいたのじゃ」

男がいる前で堂々と下着姿をさらしているすみれの姉に、 姫路は流石に隠した方がいいんじゃないかと言うが理由をつけられ即却下され、 秀吉は自分の双子の姉とその姿を照らし合わせて溜息をつく。

「で、 でも吉井達がいるんですよ!」

「……………坊や達、 私の下着見るの嫌？」

「「むしろ最高の気分です!!」(ブシャアアアアアアア)」「」

「これで問題ないわね」

しかし島田は諦めずに説得にかかるが、すみれの姉が色っぽい声でバカ×2を誘惑して、あっさり撃沈され血の池がさらに広がる。

「作戦会議ができねえ。あのエロい姉をどうにかしてくれチビ」

「お姉ちゃんはエロくないです。自分のしたいことのためならどんな手段でも使っただけです。それがたまたま下着のままだったから誘惑しただけで、別にエロくないですー」

「で、でもあの格好は問題があると思んだけど」

「パクパク（鼻を抑えている指の間から血が流れているくせによく言っぜ）」

第8問（後書き）

一言言わせてください。

すみれの姉はエロいだけのキャラじゃないですー!!

す「だからエロくないですー!!」

第9問

「あーあー、家を血だらけにして、掃除どうするのよ？」

「お姉ちゃん今更ですー」

「う、うべんなぞい」

「謝る前に鼻血止めるのじゃ二人とも。貧血で死んでしまっぞ？」

今だに鼻血が止まらない男子組。特に明久とムッツリーニは顔が真っ青になって今にも死にそうだ。

「お姉さん！ 下着を隠してください！」

「嫌よ」

「吉井くん達が死んじゃいます！」

「どうでもいいわ」

「お姉ちゃん、ペロペロキャンディーですよー」

「仕方ないわね。履いてくれればいいんですよ」

「「そんなもので!?!」」

島田と姫路の必死の説得も、明久達の死も、すみれの持っている一つのペロペロキャンディーの価値より低いようだ。

リビングから一度出て行くすみれの姉。

「お姉ちゃんは可愛いですー」

「た、助かったぜチビ」

「ありがとう千草さん」

「どういたしましてー」

すみれの機転により、命が救われた雄二と平賀はすみれに礼を言うが、

「……………もうちょっと、もうちょっと見ていたかった」

「……………不完全燃焼」

「……………燃焼するのは命じゃな」

自分の命より欲望を重視するバカ×2は血涙を流して悔しがり、そんな二人を見て溜息をつく秀吉。

雄二は鼻血を止める為にティッシュを鼻に突っ込んで、

「なあ、そろそろ作戦会議始めようぜ」

「……………あ……………」

「何のために来たのか忘れてたのか」

バカと天然とエロに振り回される両クラス代表の苦勞は計り知れな

い。

「「「おじゃまりましたー」「」」

「はい。明日はよろしくですFクラスさん」

「おう！任せとけ」

「千草さんまた明日」

「バイバイですー」

あの後きわどいスカートをはいてきたすみれの姉がペロペロキャンデーを舐めているところを明久とムツツリー二は凝視していたため、余計な邪魔が入らず作戦会議はスムーズに進んだ。

ちなみに雄二と平賀はそんな誘惑じみたすみれの姉の行動を見ないように必死に耐えながらの作戦会議だったので、かなり精神的ダメージは大きかった。それだけに、作戦が出来た時の達成感はずごかったです。軽く涙していた。

「よし！私も今から勉強するですー！」

「ダメよすみれ」

「なんでですかお姉ちゃん!？」

明久達を見送ってから、明日の戦争のためのテスト勉強をしようとするすみれを止める姉。

「徹夜して振り分け試験Dクラスになったのは誰だったっけ？」

「むう、でも努力をかかすのはいけないんです！」

「すみれ、よく聞きなさい。それは努力じゃなくて無茶なだけ。それに前はすみれだけのことだったから大したことなかったけど、もし今回も体調を崩したらクラスの皆に迷惑をかけるのよ？しかも自分の自己満足のために勉強した結果でね。だから無茶したらダメよ？」

「……はい」

優しくすみれに言い聞かせる。すみれも姉の言うことは逆らえないのか、それとも姉の言ったことが正論だと思ったのか素直に頷く。

そしてすみれは姉の大きな胸に顔をうずめ、

「……やっぱりFクラス代表さんは言うことが違うです」

「すみれ、私をバカにしているの？私はAクラスの真面目ちゃんと勉強するのが嫌だったから手を抜いたんだからね」

「……悪い子です」

「あんたみたくない子ちゃんではないわね」

くすくす笑うすみれの姉。

「…………すみれ、緊張してるでしょ?」

「…………え?」

「徹夜で勉強したかったのも安心したかったから、でしょ?」

「……………そうかもです」

「そりゃあ、Dクラスにいる学年主席レベルの生徒なんて期待されるに決まっているからね。緊張するのも無理ないわ。でも今日は早く寝なさい。私が一緒に寝てあげるから」

「……………宿題は?」

「……………ソナモノデナイワヨ」

「カタコトですー」

くすつ、と笑うすみれ。姉のおかげで緊張も軽く和らいだのか、先程より少し表情が柔らかくなり、そんなすみれを見て姉も満足そうに笑い、二人は家の中に入った。

「パクパク（寝る前に鼻血の処理しとかないと、とつつぁんと母君に怒られるぞー）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5407z/>

バカとDクラスの努力っ娘

2011年12月23日04時00分発行